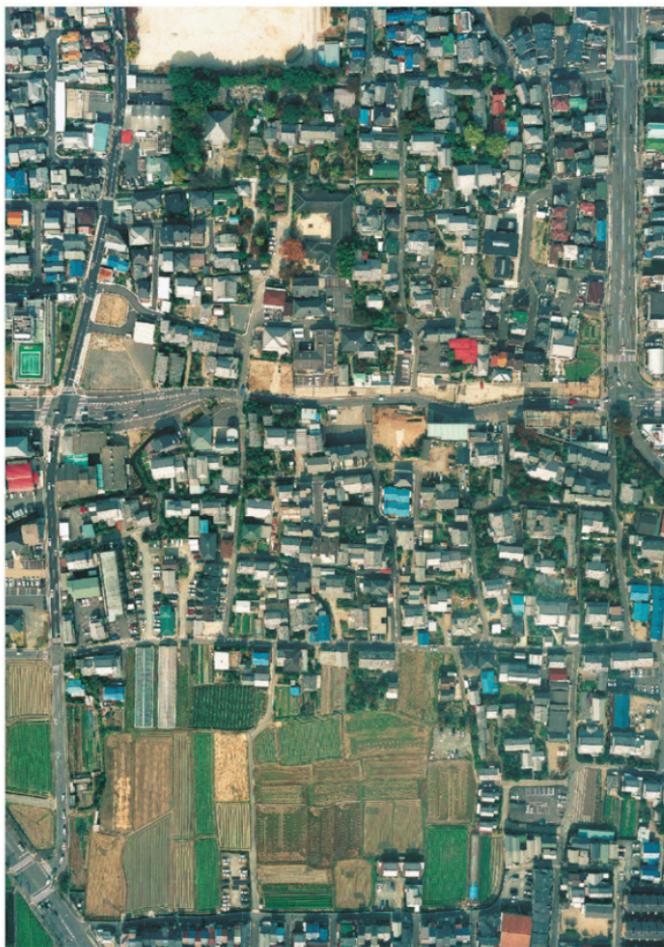


圖 版



今里周辺の現況（平成15年10月）（株）かんこう撮影

序 文

長岡京市を含む乙訓地域は京都盆地の南西部に位置し、交通の要衝となっています。天王山と男山との間の狭部が京都盆地への入り口となっているため、各時代にわたって様々な文化が流入しています。「水陸の便」により当地に都が置かれたのも、この地理的優位性によるものといえます。

このような乙訓地域の中でも、古代において中心的なところが今里地区であり、ここには郡名を冠する白鳳寺院「乙訓寺」が現在に命脈を保っています。

本書は市道今里長法寺線整備事業にかかる平成15年度発掘調査に関する報告書です。

平成8年度から発掘調査が開始されました市道今里長法寺線整備事業も本年度で8年目になりました。第2工区としては長岡京市埋蔵文化財調査報告書第23・27集に続いて3冊目、事業当初からでは7冊目の報告となります。

今回の調査では、乙訓寺の南を流れる風呂川によって形成された流路堆積が各所で確認され、堆積層から様々な時代の遺物が出土しました。

これらの遺物の多くは北接する乙訓寺との関係が想起されますが、他に埴輪など古墳に関係する遺物もあります。

これまでの調査で得られた車輪石や埴輪などの資料を総合して、未発見の古墳が付近に存在する可能性が考えられるようになってきていますが、今回の調査でも補強する資料を得ることができ、当地を解明する重要な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、現地調査から整理・報告作業に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

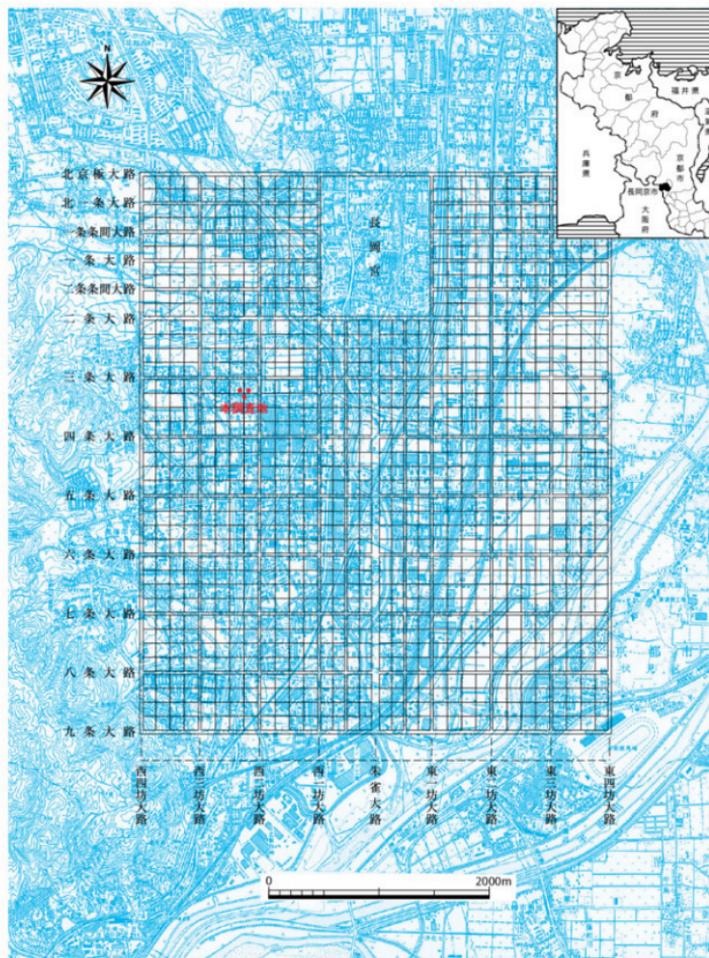
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
理事長 芦田 富 男

凡 例

1. 本書は、平成15年度に今里二丁目および三丁目で行った都市計画街路今里長法寺線（第2工区）整備事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、長岡京市広域道路課の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係主査原秀樹が担当した。
3. 本地点は、長岡京跡右京四条三坊一町・八町および今里遺跡、乙訓寺に該当する。各調査地は、今里三丁目1地内を長岡京跡右京第777次（7ANIS T-11地区）調査、今里三丁目2地内を右京第784次（7ANIHR-7地区）、今里二丁目9地内を右京第792次（7ANIHN-5地区）調査として実施した。
4. 長岡京跡の調査次数は、右京域での調査件数を通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。長岡京跡の条坊名称は、山中章『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原に従った。
5. 本書で使用した国土座標は、旧座標系の第VI系である。
6. 本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』（1998年版）によった。
7. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
8. 遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。
9. 本書の編集と執筆は原が担当した。なお、まとめの参考資料は、中島皆夫（センター調査係主査）と高妻洋成（独立行政法人奈良文化財研究所 保存修復科学研究室 主任研究官）氏が執筆した。

付表-1 本書報告調査一覧表

調査次数	所在地	調査期間	調査面積
右京第777次	今里三丁目1	2003年6月23日～2003年8月22日	341㎡
右京第784次	今里三丁目2	2003年8月25日～2003年9月30日	104㎡
右京第792次	今里二丁目9	2003年10月27日～2003年10月31日	29㎡



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

序文	i
凡例	ii
はじめに	1
第1章 長岡京跡右京第777次（7ANIIST-11地区）調査概要		
1 調査経過	4
2 検出遺構	4
3 出土遺物	11
第2章 長岡京跡右京第784次（7ANIHR-7地区）調査概要		
1 調査経過	17
2 検出遺構	17
3 出土遺物	23
第3章 長岡京跡右京第792次（7ANIHN-5地区）調査概要		
調査概要	26
まとめ	28
参考資料 長岡京跡右京第740次（7ANINC-14地区）調査出土の繻銭	31

図 版 目 次

巻頭図版 今里周辺の現況(平成15年10月)(株)かんこう撮影

長岡京跡右京第777次調査

- 図版 1 (1) 1トレンチ全景(西から)
(2) 流路 S D 06と掘立柱建物 S B 05(北から)
- 図版 2 (1) 流路 S D 06A-A' 断面(東から)
(2) 流路 S D 06E-E' 断面(西から)
(3) 掘立柱建物 S B 05(西から)
(4) 2トレンチ全景(東から)
- 図版 3 (1) 3トレンチ全景(東から)
(2) 溝 S D 07(北から)
(3) 流路 S D 11(東から)
- 図版 4 (1) 古墳時代の土師器
(2) 古墳時代の須恵器
- 図版 5 (1) 埴輪
(2) 平瓦

長岡京跡右京第784次調査

- 図版 6 (1) 1トレンチ全景(西から)
(2) 石列 S X 03(北から)
(3) 石列 S X 11(北東から)
(4) 溝 S D 15(東から)
- 図版 7 (1) 2・3トレンチ全景(東から)
(2) 4トレンチ全景(東から)
(3) 石垣 S X 06(北から)
(4) 石垣 S X 06副木(南から)
- 図版 8 (1) 調査地遠景(東から)
- 図版 9 (1) 風字硯
(2) 瓦器脚部
(3) 長岡京期から平安時代の土器

長岡京跡右京第792次調査

- 図版 8 (2) 1 トレンチ全景(西から)
(3) 2 トレンチ全景(南から)

参考資料 長岡京跡右京第740次調査

- 図版10 繻銭のX線CT画像- 1
図版11 繻銭のX線CT画像- 2
図版12 (1) 繻銭のX線CT画像- 3
(2) 処理前後の繻銭

挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図	長岡京条坊復元図と周辺調査地 (1/5000)	2
第4図	1トレンチ検出遺構図 (1/150)	4
第5図	1トレンチ土層図 (1/100)	5
第6図	溝SD06土層図 (1/40)	6
第7図	1トレンチ西区・2トレンチ土層図 (1/100)	7
第8図	1トレンチ西区平面図 (1/100)	7
第9図	2トレンチ検出遺構図 (1/200)	9
第10図	3トレンチ検出遺構図 (1/100)	10
第11図	3トレンチ・溝SD11土層図 (1/100)	10
第12図	弥生土器実測図 (1/4)	11
第13図	古墳時代の土師器実測図 (1/4)	12
第14図	古墳時代の須恵器実測図 (1/4)	12
第15図	長岡京期から平安時代の遺物実測図 (1/4)	13
第16図	中世遺物実測図 (1/4)	13
第17図	木製品実測図 (1/2・1/4)	13
第18図	平瓦実測図 (1/6)	13
第19図	埴輪実測図 (1/4)	15
第20図	石器実測図 (1/2)	15
第21図	1～3トレンチ検出遺構図 (1/100)	19
第22図	1～3トレンチ土層図 (1/100)	21
第23図	4トレンチ検出遺構図 (1/100)	23
第24図	土器実測図 (1/4)	24
第25図	杭実測図 (1/8)	24
第26図	石器実測図 (1/2)	25
第27図	1・2トレンチ平面図・土層図 (1/100)	27
第28図	周辺調査地と地形条件 (1/5000)	29
第29図	緋銭出土状況 (南東から)	31
第30図	顕微赤外吸収スペクトル	33

付 表 目 次

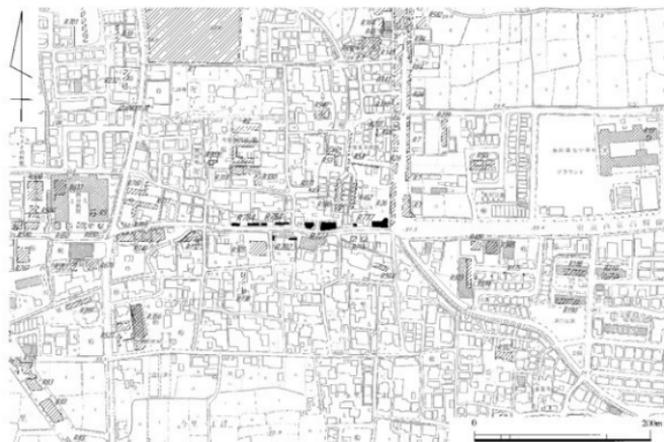
付表- 1	本書報告調査一覧表	ii
付表- 2	續銭の銭種	34
付表- 3	報告書抄録	36

はじめに

今回の調査は、乙訓寺の南側を東西に走る都市計画街路今里長法寺線の道路拡幅に伴う事前の発掘調査として実施した。一連の調査は、平成13年に右京第716次調査、平成14年に右京第732次調査と同第740次調査が実施されている。調査は、生活道路と既存の埋設管を避けた家屋跡地にトレンチを設定したため、小さなトレンチが連続する形となったが、東側から順に掘削と埋め戻しを繰り返しながら調査を進めた。調査は、風呂川の北側で右京第777次（7 A N I S T - 11地区）調査と同第784次（7 A N I H R - 7地区）調査を、風呂川の南側では同第792次（7 A N I H N - 5地区）調査を実施した。

調査対象地内の風呂川は、道路下の暗渠となっているが、昔の様子を聞いたところ以前は川で洗濯や洗い物ができたそうである。調査地点は、低位段丘Ⅰ面を削る開析谷から氾濫原Ⅰに位置しており、地形に沿って緩やかに蛇行する川は西から東へと次第に低くなっていくが、北と南は段丘面へ向かって次第に高くなっていく。付近の標高は、調査区東端の水田付近で約27.3m、西端で29.2m、風呂川南側の段丘上は32.5m前後である。

周辺の地形条件と既往の調査地点は第28図のとおりである。図中では、低位段丘Ⅰ面を削る東西方向の開析谷のうち、南側には堤を築いたため池（薬師池）があり、その谷筋に沿って風呂川が東流する。一方、北側の谷筋には蓮ヶ糸川が流れている。段丘面の西側は、緩やかに傾斜する扇状地が広がるのに対して、東側は高さ4～5mの段丘崖に限られた小畑川の氾濫低地が広がる。南北の谷筋にはさまれた段丘上には、乙訓の郡名を冠する乙訓寺があり、さらに北へ続く段丘面



第2図 発掘調査地位置図（1/5000）

上には、乙訓坐火雷神社に比定する説もある角宮神社が鎮座する。段丘崖下の地形変換線に沿って古山陰道のルートが想定されており、当地の北西600mには乙訓園に比定される更ノ町遺跡が位置する。このような地理的・歴史的環境からみて、当地一帯が古代より乙訓郡の中心地域であったと考えられる。乙訓寺は、長岡京時代に早良親王が幽閉されたことで知られるが、現在の堂舎は江戸時代に建立されたものである。昭和41年（1966）の学校建設時に行なわれた発掘調査では、講堂跡と推定される礎石建物が発見されている。

本地点は、長岡京跡、今里遺跡、乙訓寺に含まれており、これまでに多くの発掘調査が実施されている。開発に伴う調査の大半は、段丘上の旧集落では少なく、水田地帯を通る道路建設に伴うトレンチ調査が多く行なわれている。

今里遺跡は、旧石器時代から室町時代に至る市内でも屈指の複合遺跡である。旧石器の大半は二次堆積層から出土したものであるが、右京第544次調査⁽⁸⁾では旧石器単純層から国府形ナイフ形石器と剥片接合資料が出土しており、土壌分析ではA Tおよびアカホヤガラスが確認されている。縄文時代は、中期から晩期の遺跡が段丘崖下の氾濫原に分布する。弥生時代は、風呂川の開析谷北辺の段丘部に中期を中心とする遺構が分布する。集落の範囲や規模など、まだ明らかでないが、後期には北東部の氾濫原から地形的に連続する井ノ内遺跡の低位段丘にかけてまとまりが見られる。古墳時代は、これまで天神池周辺の氾濫原地帯に中期～後期の集落が確認されていたが、近年の調査では段丘上から前期の竪穴住居が検出されている。奈良時代の遺跡は、乙訓寺の西方から建物や溝、土坑などが確認されており、「次官」と墨書された土師器の出土は、当地に官衙施



第3図 長岡京条坊復元図と周辺調査地（1/5000）

設が存在したことを示唆するものであろう。乙訓寺境内とその周辺から、創建期の瓦と考えられる白鳳時代の軒瓦や長岡京期から平安時代の修理瓦などが出土している。

長岡京の条坊復原によると、右京四条三坊一町から八町にまたがり、西三坊坊間東小路や四条条間北小路が想定された（第3図）。建物や井戸、土坑などの生活関連遺構は各所で検出されるが、条坊側溝については段丘上の確認例は少ない。段丘崖下では東西路、南北路とも想定位置付近で確認されているのと対照的である。長岡京期の遺構が希薄であるのは、当地に遷都前から乙訓寺の関連施設や官舎が営まれたことによると考えられる。平安時代は、乙訓寺東方の段丘下から概据え付け穴をもつ建物や溝、土坑などが検出されている⁽¹⁸⁾。乙訓寺は、寛平法皇（宇多法皇）の行宮となったことから中世には法皇寺とも呼ばれた。

本地点における調査では、開析谷を流れる川跡と谷筋の土地利用を解明し、混入した遺物から段丘上の遺跡の様子を知る新たな資料の出土が期待された。

第1章 長岡京跡右京第777次(7ANI ST-11地区)調査概要

—右京四条三坊一町、今里遺跡、乙訓寺—

1 調査経過

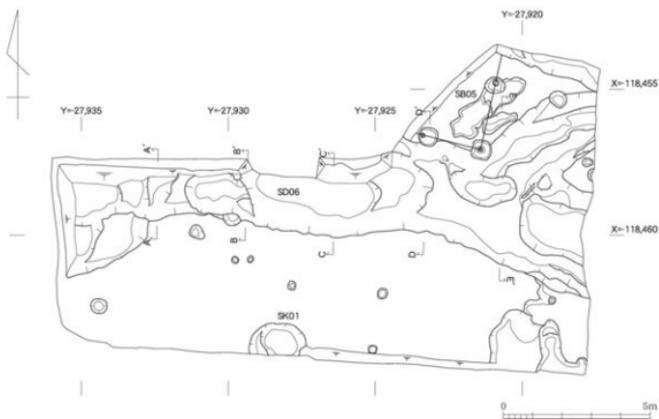
調査対象地は、外環状線が北に曲がる交差点の北西角から、都市計画街路今里長法寺線を西へ一筋目のT字路までとした。調査では、地下の埋設管と生活道路を除いた個所にトレンチを設定し、東から順に掘削、調査、埋め戻しを行なった。調査前は、1トレンチが水田、2・3トレンチは家屋跡地である。本調査区の国土座標値は、2トレンチ中央で第VI座標系の $X=-118,463$ 、 $Y=-27,985$ である。

2 検出遺構

(1) 1トレンチ

東西17m、南北11mのL字形。遺構は、耕作土、床土、褐灰色砂質土を除去した地山面から検出される。地山は黄褐色系の粘質土となっており、西から東へ緩やかに傾斜する。調査区東方にはわずかに遺物包含層が残存するが、これは耕地化された際に低い部分が残ったものである。なお、調査中は西方から湧水が絶えなかった。

主な検出遺構は、土坑SK01、流路SD06、掘立柱建物SB05などである。また、本トレンチ西側に6m×7mの規模で1トレンチ西区を開けたが、流路内堆積とみられる砂礫層を検出した



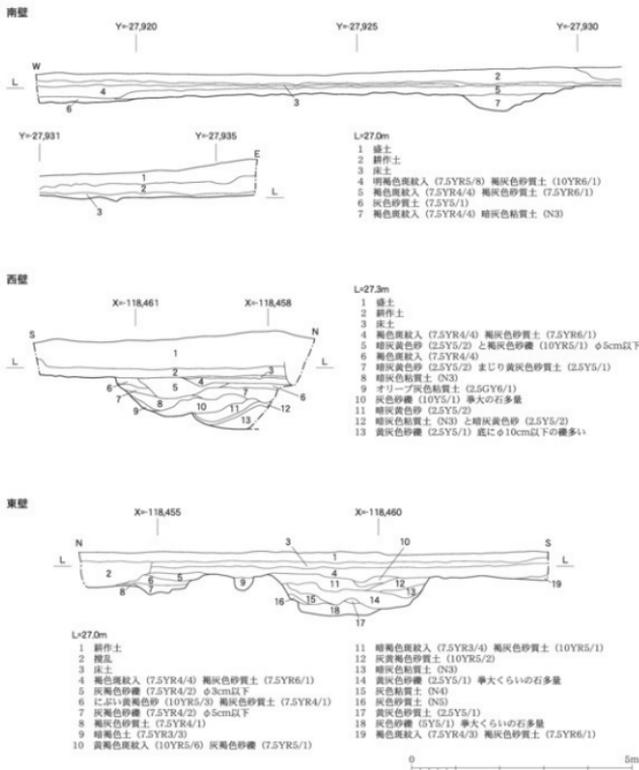
第4図 1トレンチ検出遺構図(1/150)

ほかは何ら確認できなかった(第7・8図)。1トレンチの地山面の標高は、東端26.7m、西端27.1mである。

土坑S K01 南壁にかかって検出された直径約2mの円形掘形。深さは0.4m。遺物は、土師器と陶器が出土した。近世と考えられる。

掘立柱建物S B05 東西1間、南北1間以上。柱掘形は、一辺0.6～0.7mの不整円形と隅円方形を呈する。柱間寸法は、東西2.1m、南北2.4mである。建物の方位は、北で東に8°振る。柱根は残存しない。遺物は、土師器の小片が出土した。

流路S D06 トレンチ中央を東西方向に延びる。北肩の一部は調査区外へ続くが、東壁では



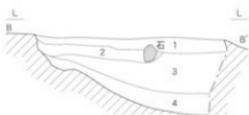
第5図 1トレンチ土層図(1/100)

6 検出遺構



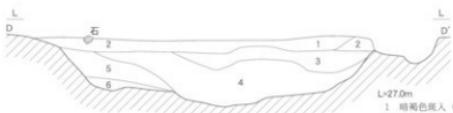
L=27.0m

- 1 暗褐色炭入 (7.5YR3/4) 褐灰色砂質土 (10YR6/1)
- 2 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
- 3 褐灰色砂礫 (10YR5/1) 準大~20cm程度の石多量



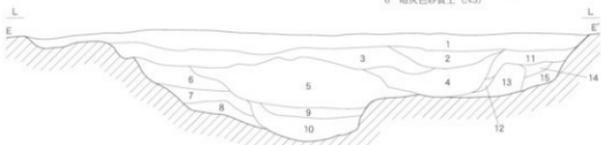
L=27.0m

- 1 暗褐色炭入 (7.5YR3/4) 褐灰色砂質土 (10YR6/1)
- 2 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1)
- 3 褐灰色砂礫 (10YR5/1)
- 4 暗灰色砂質土 (N3/1) と黄灰色砂 (2.5YR6/1) の互層



L=27.0m

- 1 暗褐色炭入 (7.5YR5/3) 灰白色砂 (10YR7/1)
- 2 暗褐色炭入 (7.5YR3/4) 褐灰色砂質土 (10YR6/1)
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) と褐灰色シルト (7.5YR5/1)
- 4 にごり褐色砂 (2.5YR6/3) と褐灰色砂礫 (10YR5/1)
- 5 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)
- 6 暗灰色砂質土 (N3)



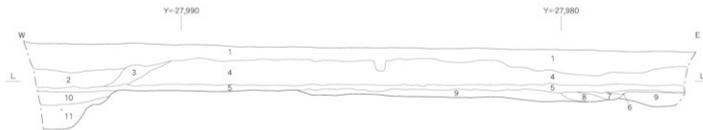
L=27.0m

- 1 暗褐色炭入 (7.5YR3/4) 褐灰色砂質土 (10YR6/1) φ10cm前後の礫
- 2 にごり黄褐色砂質土 (10YR5/2)
- 3 暗褐色炭入 (7.5YR3/4) 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
- 4 暗灰色粘質土 (N3)
- 5 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2) φ15cm以下の礫多量
- 6 灰色砂質土 (N4)
- 7 オリーブ灰色砂質土 (2.5GY5/1) 小礫含む
- 8 暗灰色砂質土 (N3)
- 9 暗灰色砂質土 (N3) φ10cm以下の礫含む
- 10 暗褐色砂礫 (10YR4/1) φ15cm以下の礫多量
- 11 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
- 12 暗青灰色粘質土 (10BG4/1)
- 13 灰白色砂礫 (2.5Y5/1) φ10cm以下の礫多量
- 14 暗青灰色粘質土 (10BG4/1) 小礫含む
- 15 灰色砂質土 (10Y4/1)

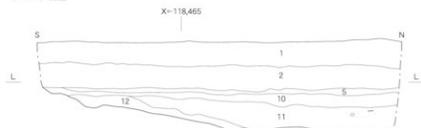
0 1m

第6図 流路S D06土層図(1/40)

2トレンチ北壁



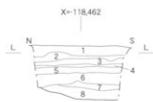
2トレンチ西壁



L=28.0m

- 1 盛土
- 2 にじい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 小礫含む
- 3 明黄褐色土 (10YR6/6)
- 4 褐色砂質土 (7.5YR4/3)
- 5 田跡作土
- 6 灰色砂質土 (N6)
- 7 浮灰色砂 (10BG6/1)
- 8 オリーブ灰色砂礫 (5Y6/4)
- 9 灰色砂礫 (N5)
- 10 明赤褐色埋込土 (5YR5/8) 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1) } SD07
- 11 灰色粘質土 (N4/1)
- 12 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)

1トレンチ西区東壁

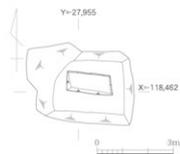


L=28.0m

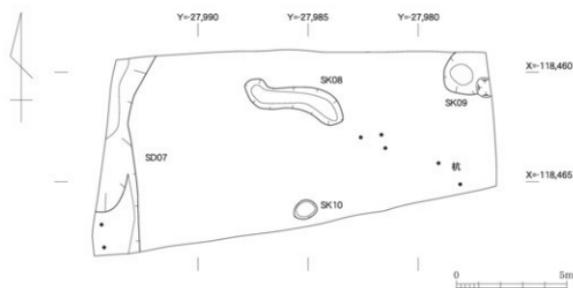
- 1 盛土
- 2 田跡土
- 3 にじい黄褐色砂質土 (10YR6/3)
- 4 淡黄色砂質土 (2.5Y7/3) マンガン埋込土
- 5 暗褐色埋込土 (7.5YR3/4) 褐灰色土 (5YR6/1)
- 6 暗赤褐色埋込土 (5YR3/4) 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1)(炭粒)
- 7 黄灰色砂礫 (2.5Y6/1) φ10cm前後の石が多い
- 8 褐灰色砂 (10YR6/1) + 黄灰色砂礫 (2.5Y5/1)



第7図 1トレンチ西区・2トレンチ土層図 (1/100)



第8図 1トレンチ西区平面図 (1/150)



第9図 2トレンチ検出遺構図(1/200)

二股に別れており全体的に蛇行気味に下降すると見られる。幅は、中央付近で約3m、東壁では幅約7mである。流路の底面はかなり凹凸がある。埋土は、砂やシルト、礫を含んでおり、部分的に拳大の石が多量に入り込む。一度期に上流から押し出されたものと考えられる(第6図)。遺物は、弥生時代から平安時代の土器類が出土しているが、中でも埴輪片が比較的多く混入している。

本流路は、開析谷を東流する風呂川の旧流路と考えられる。二股に分かれる川筋のうち北側の流路は氾濫原の内側を、南側は現在の風呂川と平行して段丘崖の裾を通ると予想される。なお、現在の風呂川は本流路の南側を流れる。

(2) 2トレンチ

東西18m、南北6～9mのいびつな四角形。当地は、約1mの盛土と旧宅地造成土、耕作土以下、地山となる。地山面は、全面に砂礫が広がる。遺構は、南北方向の溝SD07、土坑SK08、SK09、SK10と杭などを検出した。地山面の標高は、東端27.3m、西端27.7mである。

溝SD07 調査区西端から東肩の一部を検出する。南から北へ緩やかに落ち込んでおり、深さは1mである。下層の灰色粘質土から、漆器椀や木材片が出土した。底では湧水がみられた。

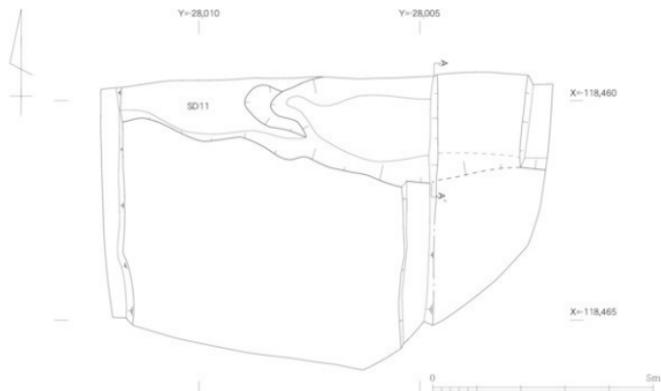
土坑SK08 砂礫層に灰色系の粘質土が堆積した不整形な凹み。深さ0.1m未満。遺物は出土していない。

土坑SK09 調査区北東隅の浅い円形凹形。深さ約0.4m。遺物は出土していない。

土坑SK10 直径約1mの不整形。深さ約0.1m前後。遺物は出土していない。

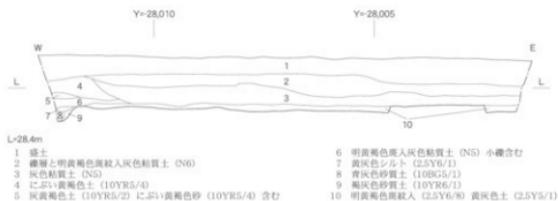
これら3ヶ所の土坑は、埋土や検出状況からみて近世以後のものと考えられる。点在する杭跡についても、木質の一部が残存する程度である。

地山砂礫層の断ち割りによると、下層には検出面では見られなかった人頭大ほどの大きな石を含む砂礫層が堆積している。1トレンチで検出した風呂川の旧流路について、本地点では確認できなかったが、溝SD07が地形に直交して南から北へ延びる状況から推測して旧流路はこれより北に位置すると予想される。



第10図 3トレンチ検出遺構図 (1/100)

北壁



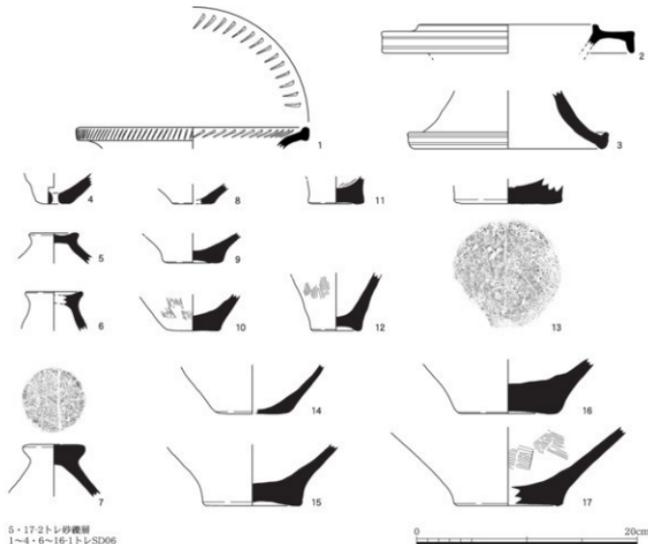
西壁



SD11



第11図 3トレンチ流路S D11土層図 (1/100)



第12図 弥生土器実測図(1/4)

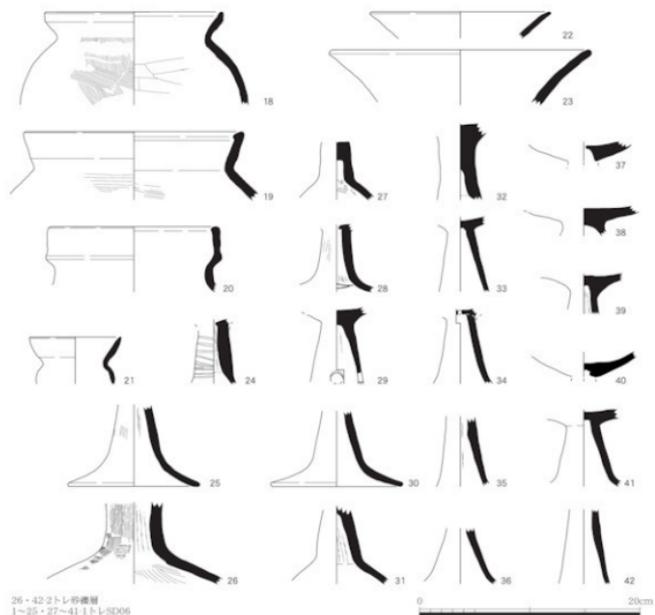
(3) 3トレンチ

東西10m、南北7mのいびつな方形。盛土、整地土以下、地山となる。地山面は、2トレンチと同じく全面が砂礫で覆われる。遺構は、調査区北半部から東西方向の流路S D11を検出した。地山面の標高は約28mである。

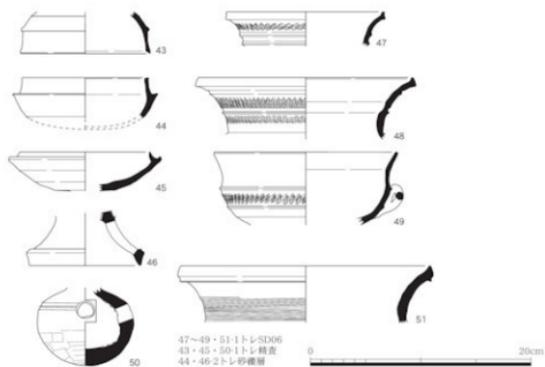
流路S D11 砂礫層と溝の輪郭が不明瞭なことから、当初は検出することができず、断ち割りて遺構を確認した。溝は小さく蛇行しながら東流しており、1トレンチの流路S D06と同様に底面には深い凹みがみられる。規模は、中央付近で溝幅約2m、深さは最深部で約1mである。埋土は、礫を多量に含む砂質土からなる。長岡京期を中心とする遺物が出土しており、中でも破損していない平瓦の出土は初めてである。

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナに12箱である。縄文時代から弥生時代の石器類、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器と埴輪、長岡京期の土師器、須恵器、製塩土器、緑釉単彩陶器と軒瓦、中世の土師器、青磁と木製品、近世の陶磁器などがある。遺物の大半は、流路S D06から出土したものである。



第13図 古墳時代の土師器実測図 (1/4)

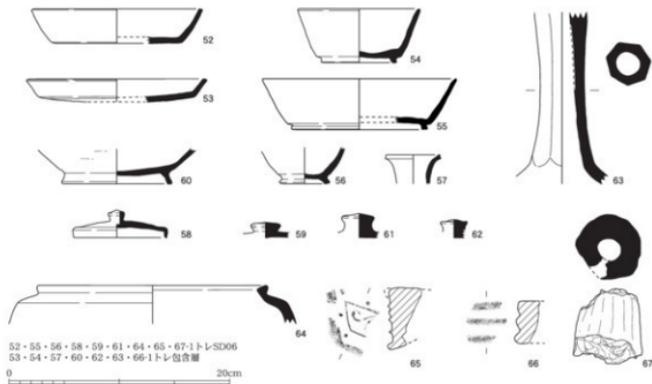


第14図 古墳時代の須恵器実測図 (1/4)

弥生土器(第12図) 1トレンチの流路SD06と、2トレンチの砂礫層から出土した。土器は摩滅しており、図示できるものは限られる。壺(1)、高杯(2)、甕の蓋(5-7)、甌(4)、底部片(3・8-17)がある。1は、壺口縁部。復原口径21cm。端面にハケ状工具による刺突文を巡らせ、口縁部内面は扇形文を施す。2は、高杯の杯部。口縁部に凹線文の痕跡がわずかに残る。3は、底部片。高杯か。端面に凹線文を施す。4は、底部中央に丹孔を穿つ。底径3cm。5-7は、蓋。5・6は、天井部が凹む。7は、木の葉の圧痕が残る。8-17は、底部片。10は、外面ハケメ調整。13は、木の葉の圧痕が残る。これらの遺物は、中期前葉の甕(11)などを含むが、大半は中期後葉に比定される。

古墳時代の土師器(第13図) 1トレンチの流路SD06と、2トレンチの砂礫層から出土した。甕(18・19)、壺(20)、小型丸底壺(21)、高杯の杯部(22・23)、高杯の脚柱部(24-42)がある。18は、口径16.2cm。口縁端部は内側に面をもつ。体部内面のヘラケズリは、上半部付近で終わる。外面はハケメ調整。19は、口径20cm。口縁端部を内側に肥厚させた布留式甕。外面は肩部に横方向のハケメを施す。20は、いわゆる二重口縁の壺。口径15.6cm。21は、口径8.3cm。摩滅しており、器面調整は不明。22は、口径16.4cm。23は、口径23.8cm。口縁部が大きく開いて、杯部が屈折する形態。24は、横方向の沈線を施す。脚柱部の形態は、上半が中実のもの(32)以外は中空。外面はハケメ調整、内面はしぼり目が残る。これらの遺物は、布留式の新相に比定される。

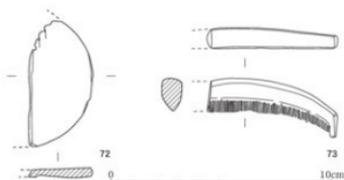
古墳時代の須恵器(第14図) 1トレンチの流路SD06と、2トレンチの砂礫層などから出土した。杯蓋(43)、杯身(44・45)、高杯脚部(46)、無蓋高杯(49)、甕(47・48・51)、甌(50)がある。43は、口径11.8cm。44は、11.5cm。46は、長方形の三方透かし。47は、口径14.4cm。



第15図 長岡京期から平安時代の遺物実測図(1/4)

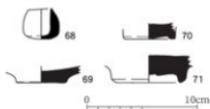
頸部に櫛描波状文と二条の凸帯を施しており、以下は欠損する。48は、19.6cm。頸部に凸帯と櫛描波状文を交互に施す。49は、口径16.6cm。二条の凸帯の間に櫛描波状文を施す。耳状の把手が付く。これらの須恵器は、陶邑窯のTK47型式に相当するものであろう。45は、口径11.8cm。50は、体部下半を不定方向にヘラケズリを行なう。51は、口径22.6cm。頸部にカキメ調整を行なう。これらの須恵器は、陶邑窯のTK209型式に相当するものであろう。

長岡京期の遺物（第15図） 1 トレンチの流路SD06と3 トレンチの溝SD11などから出土した。須恵器の杯A（52）、皿A（53）、椀B（54）、杯B（55）、壺M（56・57）、蓋（58・59）、土師器の杯B（60）、蓋（61・62）、高杯（63）、緑釉単彩陶器の壺（64）、軒平瓦（65・66）、フイ

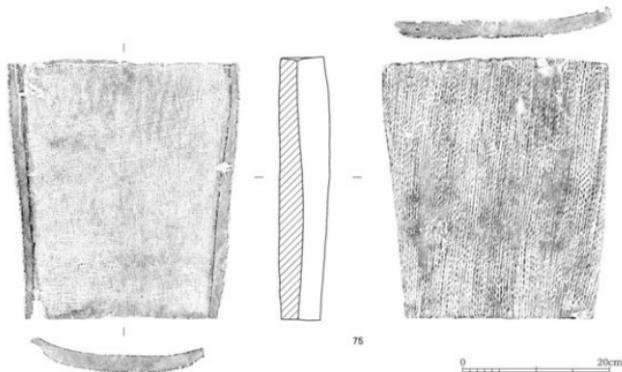


第17図 木製品実測図（1/2・1/4）

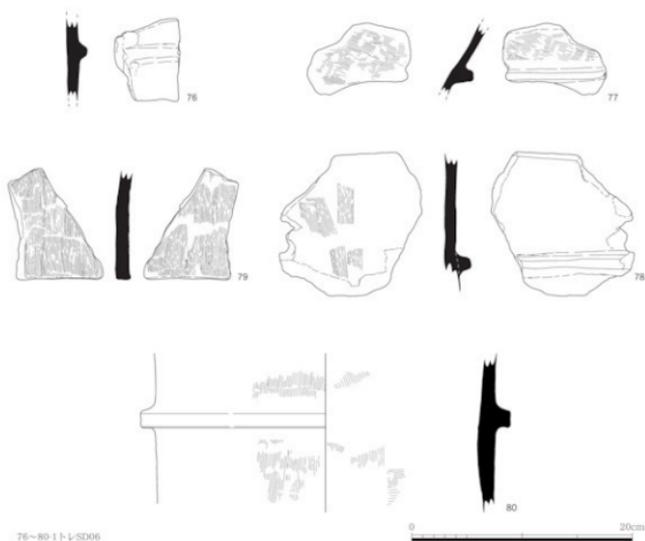
ゴの羽口（67）がある。52は、復原口径15.5cm、器高3.2cm。53は、復原口径16.3cm、器高2.1cm。54は、口径11.1cm、器高4.9cm。口径に対して器高が深い。55は、復原口径17.6cm、器高4.7cm。58は、口径8.4cm、器高2.5cm。小型の壺または平瓶の蓋。天井部に重ね焼きの痕跡が残る。60は、摩滅して



第16図 中世遺物実測図（1/4）

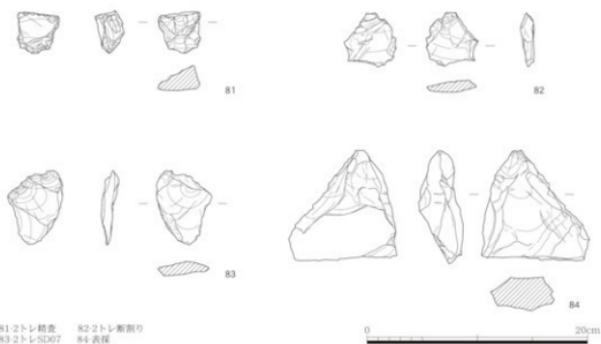


第18図 平瓦実測図（1/6）



76~80 11-L-SD06

第19図 埴輪実測図(1/4)



81 2-L-精査
83 2-L-SD307
82 2-L-新掘り
84 表探

第20図 石器実測図(1/2)

おり調整不明。口縁端部の小片がある。63は、芯に粘土を巻き付けている。脚部は7角に面取りする。64は、復原口径21cm。外面に淡い緑色の釉薬を施す。65は、瓦当面の左端が残存する。小片のため、型式は特定できない。淡灰色を呈する。66は、重弧文軒平瓦。外面は黒色。

中世の遺物(第16図) 2トレンチの溝S D 07から出土した。土師器の小型壺(68)、唐津焼の皿(69)、天目茶碗(70)、龍泉窯系青磁碗(71)がある。68は、手づくね成形。69は、糸切りされた底部外面に墨書がある。記号か。内面に重ね焼きの目跡が残る。70は、高台片。内面を施釉する。これらの遺物は、68～70が17世紀代。71は、鎌倉時代の混入品である。

木製品(第17図) 2トレンチの溝S D 07から出土した。図示できたものは、円形の板材(72)、横櫓(73)、漆器椀(74)である。72は、直径6cm前後。厚さ約0.5cm。小型曲物の底板か。73は、歯を欠損する。74は、内外面黒色を呈するが、光沢は失われている。口縁端部を欠損するが、口径は12cm前後に復元される。このほかに、用途不明の木材片がある。これらの木製品は、供伴遺物から17世紀代に比定される。

平瓦(第18図) 3トレンチの溝S D 11から出土した一枚作りの平瓦。完全な形を保ち、器表面の残存状態も良好な平瓦は極めて稀である。全長36.1cm、広端面28.3cm、狭端面23.2cm、厚さ約2cm。凸面に縄タタキ、凹面に布目痕を残す。凸面の広端面と狭端面から10cm前後のところには、縄タタキに直交する長さ2cm前後の圧痕が残る。縄タタキの工程に関連するものであろうか。凸面の狭端面の両端は、指で押さえたように凹む。凹面の布目は1枚で、縦じ合わせはみられない。側面と両端は、ヘラケズリして調整する。このほか、平瓦が数点出土しているが摩擦している。

埴輪(第19図) 1トレンチの流路S D 06から出土した。ヒレ付き円筒埴輪(76)、朝顔形埴輪(77)、円筒埴輪(78～80)である。小片で摩擦することから図示したものは少ないが、S D 06から約250点の埴輪片が出土している。76は、タガに貼付けたヒレの剝離痕跡が残る。77は、口縁部が屈曲する部分。内外面ともハケで調整する。78は、内面調整をハケとナデによる。黒斑を有する。79は、底部。79・80とも内外面ハケで調整する。なお、本地点の北約200mには今里車塚古墳が位置する。

石器(第20図) 2トレンチの二次堆積層出土と表採品がある。81・82は、チャート製の剝片。83・84は、サヌカイト製の剝片。

第2章 長岡京跡右京第784次(7ANIHR-7地区)調査概要

—右京四条三坊八町、今里遺跡、乙訓寺—

1 調査経過

調査対象地は、長岡京跡右京第777次調査の西隣に位置しており、都市計画街路今里長法寺線の道路拡幅予定地に当たる。調査では、家屋跡地に地下の埋設管と生活道路を除いた4ヶ所にトレンチを設定し、東から順に掘削、調査、埋め戻しを行なった。本調査区の国土座標値は、3トレンチ中央で第VI座標系のX=-118,463、Y=-27,985である。

2 検出遺構

(1) 1トレンチ

東西17m、南北2mの長方形。トレンチ内に水道管が通るため、この部分は盛土のまま残している。本トレンチの層位は、盛土、旧宅地整地土、近世の遺物包含層、地山となっており、右京第777次調査に比べると包含層が厚く堆積する。遺構は、第14層上面から江戸時代の遺構を検出したが、下層については安全対策上および土置き場の関係から北壁部分を断ち割って地山面を確認した。

主な検出遺構は、土坑SK02・SK12・SK16、石列SX03・SX11、溝SD10、柱穴P1である。1トレンチの地山面の標高は、東端28.2m、西端28.5mである。

土坑SK02・SK12・SK16 部分的な確認のため、各々の規模や形態は不明。SK02は、底まで下げると危険なため途中で掘り下げを止めた。井戸の可能性も残る。江戸時代の瓦や陶磁器片が出土している。

石列SX03 南北方向に、椀瓦小片と一辺0.2m未満の石を両側に立て並べて蓋をしている。掘形は無い。現在の屋敷地を限る南北堀と方向は一致しているが、本調査地では土堀などの痕跡は認められない。雨落ち用の石列であろうか。土坑SK02・SK12・SK16の埋没後に作られている。

石列SX11 南北方向に、一辺0.2m前後の石を並べている。一部石が失われたところもあるが、比較的平らな石を運ねた外側に石を立てたようである。掘形は無い。通路として利用されたものであろうか。

溝SD10 南北方向の素掘り溝。幅0.8m、深さ0.25m。検出時から全面に焼土、炭片を多量に含むが、焼けた面は無いことから投棄されたものと考えられる。長岡京期を中心とする遺物が出土した。

柱穴P1 一辺約0.6mの隅円方形。柱痕跡が明瞭である。遺物は出土していない。

下層については、厚さ約0.5mの整地土を北壁に沿って掘り下げたところ、これまで右京第777次調査で検出している砂礫からなる地山面を確認したが、流路等の遺構の有無については限られ

た範囲の中では不明である。

(2) 2 トレンチ

東西6m、南北3mの長方形。トレンチ東端は攪乱を受ける。遺構は、上下2面にわたって検出される。上面は、盛土を除いた第3層から溝S D09。下面は、地山面から流路S D15を検出した。地山直上には、厚さ0.5m前後の厚い包含層が堆積しており、人力による掘り下げは難渋した。検出面の標高は、上層が29.5m、下層が28.7mである。

溝S D09 東西方向の溝に、逆T字形に直交する南北方向の2本の溝が付く。規模は、幅0.5m、深さ0.1m前後。遺物は出土していない。

流路S D15 東西方向の流路の南肩を検出する。肩口には、褐灰色砂礫の堅く締まった地山に打ち込まれた杭を9本確認した。板材などは出土していない。埋土は、シルトと砂礫が堆積しており、人頭大ほどの大きな石もみられる。底面はほぼ平らである。流路の対岸は調査地外である。本流路は、隣接する右京第777次調査で確認された流路と一連の遺構と考えられる。長岡京期を中心とする遺物が出土している。

(3) 3 トレンチ

東西13m、南北3mの長方形。遺構は、上下2面から検出される。土層断面では、削平を受けて各遺構の検出面の層序に差異がみられるが、およそ第18層から検出している。主な検出遺構は、上面が溝S D04・05・07・08・09・13・14、石垣S X06。下面は、地山面から流路S D15・16を検出した。地山直上には、厚さ1m前後の厚い包含層が堆積しており、人力による掘り下げは難渋した。検出面の標高は、上層が29.5m、下層が29mである。

溝S D04 南北方向の溝で、深さ約0.2m。本溝は、北壁断面から明らかなように攪乱直下から掘られた大きな掘形の底が残存したものである。後述する石垣S X06の掘形に当たる。

溝S D05 南北方向の溝。幅0.6m、深さ約0.1m未溝。北壁断面からみて、第18層の残欠と考えられる。溝S D04とS D05については、トレンチの重機掘削が東側の攪乱を除去した深度を基準に進めたことにより生じたものである。

溝S D07 東西方向の溝で、北側へ落ち込んでいく。

溝S D08 南北方向の溝で、南側では浅くなり消滅する。幅0.6m前後、深さ0.1m未溝。

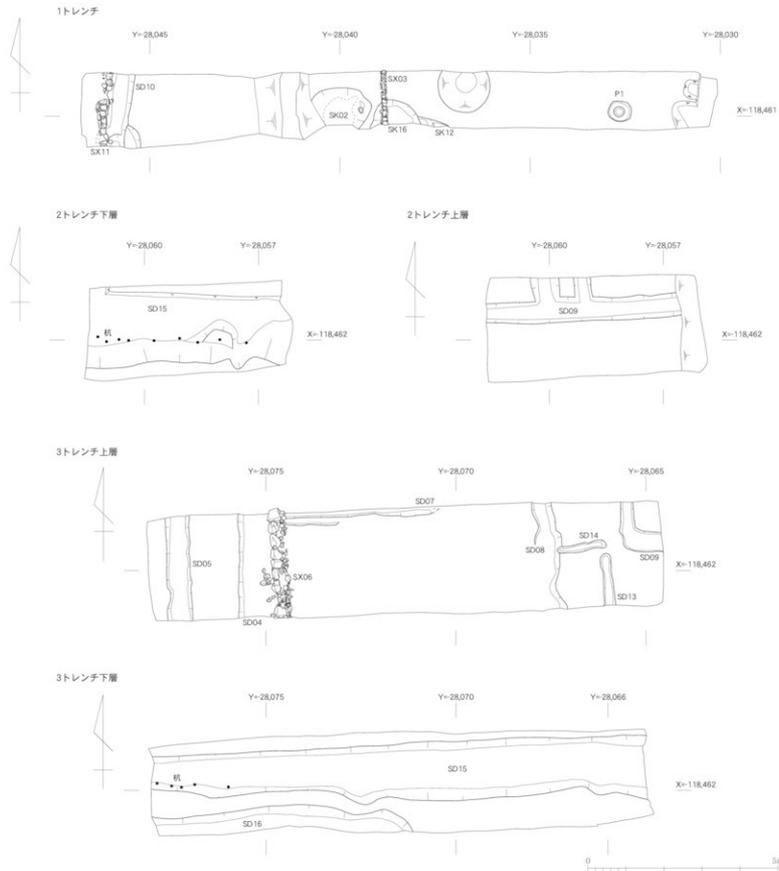
溝S D09 トレンチ東端でL字形に曲がる溝。2トレンチの溝S D09と同一の溝。幅0.3～0.5m、深さ0.1m未溝。

溝S D13 南北方向の溝。幅0.3m、深さ0.1m未溝。

溝S D14 東西方向の溝。幅0.2m、深さ0.1m未溝。

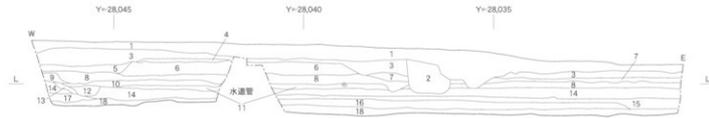
石垣S X06 一辺0.3m前後の石の平らな面を西側に向けて据える。裏側には裏込めに小さな石を詰める。本来は上に石が積まれたと推測される。石の下には直径約0.1mの2本の桐木が木口を合わせて一直線に置かれていた。北壁断面から測る掘形規模は、幅2m、深さ約1mとなる。屋敷地の境を画する施設であろうか。

流路S D15 東西方向に延びており、幅は1.5m前後でトレンチ内に収まる。西端の南肩には



第21図 1-3トレンチ検出遺構図(1/100)

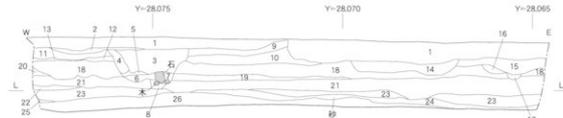
1トレンチ北壁



L=29.0m

- | | | |
|--------------------------------------|--|---|
| 1 盛土 | 7 褐色土 (7.5YR4/4) | 13 黄褐色土 (10YR5/8) |
| 2 褐色炭灰入 (7.5YR6/8) に近い黄褐色土 (10YR6/3) | 8 に近い黄褐色土 (10YR4/3) | 14 明褐色土 (7.5YR5/8) |
| 3 褐色炭灰入 (7.5Y6/8) 褐色土 (10YR6/1) | 9 褐色砂質土 (10YR5/1) まじりに近い黄褐色土 (10YR5/3) | 15 明黄褐色ブロック入 (2.5Y6/8) 褐色土 (7.5YR4/3) |
| 4 に近い黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 10 暗灰色砂質土 (10YR5/4) | 16 に近い黄褐色ブロック入 (2.5Y6/4) 褐色土 (7.5YR4/6) |
| 5 に近い黄褐色砂質土 (2.5Y6/4) | 11 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 17 灰色砂質土 (N4) |
| 6 灰黄褐色砂礫 (10Y4/2) | 12 褐色土 (10YR4/4) 炭・焼土多量 | 18 明褐色炭灰入 (7.5Y5/8) 灰色砂質土 (5Y6/1) |

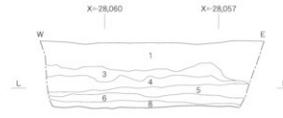
3トレンチ北壁



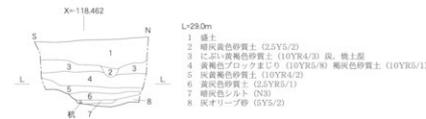
L=29.00m

- | | |
|---|---|
| 1 盛土 | 14 に近い黄褐色砂質土 (2.5Y6/4) |
| 2 灰オリーブ砂質土 (5Y6/2) | 15 明褐色土 (2.5Y7/6) |
| 3 明褐色炭灰入 (7.5YR5/8) に近い黄褐色砂質土 (10YR6/4) | 16 に近い黄褐色砂質土 (10YR6/3) (石稜多量) |
| 4 黄褐色土 (10YR5/8) | 17 明褐色土まじり (10YR6/6) 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) |
| 5 明褐色炭灰入 (7.5YR5/8) 黄褐色砂質土 (7.5YR4/1) | 18 に近い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 炭・焼土混 |
| 6 明褐色炭灰入 (7.5YR5/8) 暗灰色砂質土 (5N3) | 19 褐色炭灰入 (7.5YR4/3) 褐色砂質土 (10YR5/1) |
| 7 褐色土 (7.5YR4/3) | 20 黄褐色ブロック状じり (10YR5/6) 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2) |
| 8 暗黄褐色砂質土 (5P4/1) | 21 黄褐色ブロック状じり (10YR5/8) 褐色炭灰入 (10YR5/1) |
| 9 灰色砂質土 (5Y7/6) | 22 褐色炭灰入 (7.5YR4/3) 灰色砂 (5Y9/1) |
| 10 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) | 23 褐色砂礫 (10YR4/1) 石稜多量に含む |
| 11 褐色土 (7.5YR6/8) | 24 褐色シルト (10YR4/1) |
| 12 黄褐色砂質土 (2.5Y7/4) | 25 暗灰色シルト (N3) |
| 13 黄褐色砂土 (5YR/6) | 26 黄褐色砂礫 (2.5Y5/1) |

2トレンチ北壁面



2トレンチ西壁



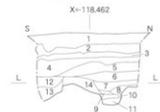
3トレンチ東壁



L=29.00m

- | |
|----------------------------|
| 1 盛土 |
| 2 明褐色土まじり (10YR6/6) |
| 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) - SD09 |
| 4 明褐色土 (2.5Y7/6) |
| 5 に近い黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 6 焼土・炭を含む |
| 7 に近い黄褐色砂質土 (10YR4/3) |
| 8 炭・焼土混 |
| 9 黄褐色ブロック状じり (10YR5/8) |
| 10 褐色炭灰入 (10YR5/1) |
| 11 褐色砂礫 (10YR4/1) 石稜多量に含む |
| 12 褐色シルト (10YR4/1) |
| 13 暗灰色シルト (N3) |
| 14 黄褐色砂礫 (2.5Y5/1) |

3トレンチ西壁

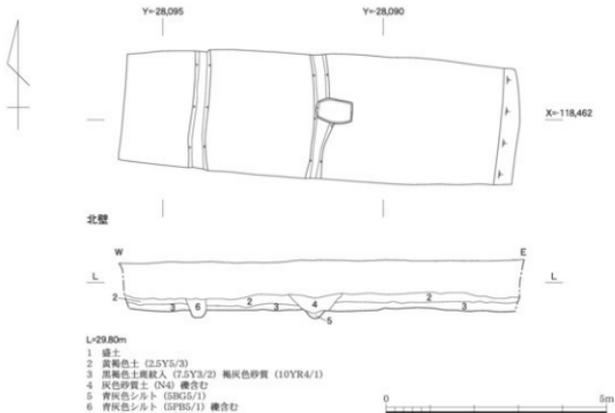


L=29.00m

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 盛土 | 7 褐色炭灰入 (7.5YR4/3) 灰色砂 (5Y6/1) |
| 2 褐色土 (7.5YR6/8) | 8 褐色砂礫 (10YR4/1) 石稜多量に含む |
| 3 黄褐色砂質土 (5YR/6) | 9 褐色シルト (10YR5/1) |
| 4 に近い黄褐色砂質土 (10YR4/3) 炭・焼土混 | 10 暗灰色砂質土 (5N3) |
| 5 黄褐色ブロック状じり (10YR5/8) | 11 黄褐色砂礫 (2.5Y5/1) |
| 6 黄褐色ブロック状じり (10YR5/8) | 12 に近い黄褐色砂質土 (10YR6/3) |
| 7 褐色炭灰入 (7.5YR4/3) 灰色砂 (5Y6/1) | 13 灰色粘質土 (N5) |
| 8 褐色砂礫 (10YR4/1) 石稜多量に含む | 14 明褐色炭灰入 (7.5YR5/8) |
| 9 褐色シルト (10YR5/1) | 15 に近い黄褐色土 (10YR5/3) |
| 10 暗灰色砂質土 (5N3) | |
| 11 黄褐色砂礫 (2.5Y5/1) | |
| 12 に近い黄褐色砂質土 (10YR6/3) | |
| 13 灰色粘質土 (N5) | |
| 14 明褐色炭灰入 (7.5YR5/8) | |
| 15 に近い黄褐色土 (10YR5/3) | |

0 5m

第2図 1 - 3トレンチ土層図 (1/100)



第23図 4トレンチ検出遺構図 (1/100)

杭が5本残存する。埋土は、シルトと砂礫が堆積しており、人頭大ほどの石も含まれる。底面はほぼ平らである。

溝SD16 南壁にむかって落ち込んでいる。

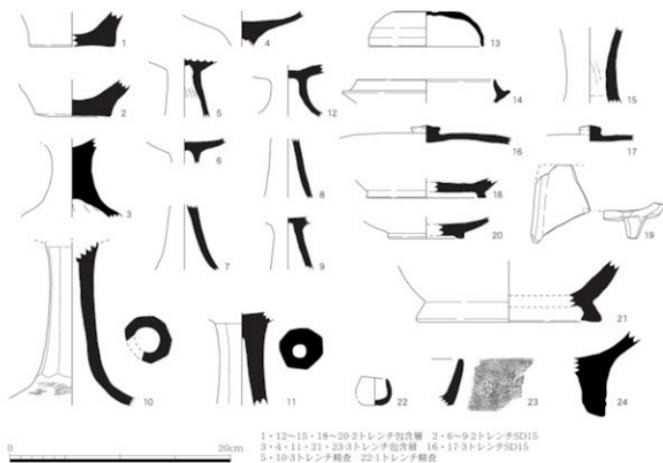
(4) 4トレンチ

東西9m、南北3mの長方形。盛土以下の堆積層には、これまでのような遺物包含層は見られず、遺構も確認できなかった。整地層を切り込む攪乱を確認しただけである。当地では、壁面や地山面から湧水が絶えなかった。地山面の標高は、東端で29.2m、西端で29.1mである。

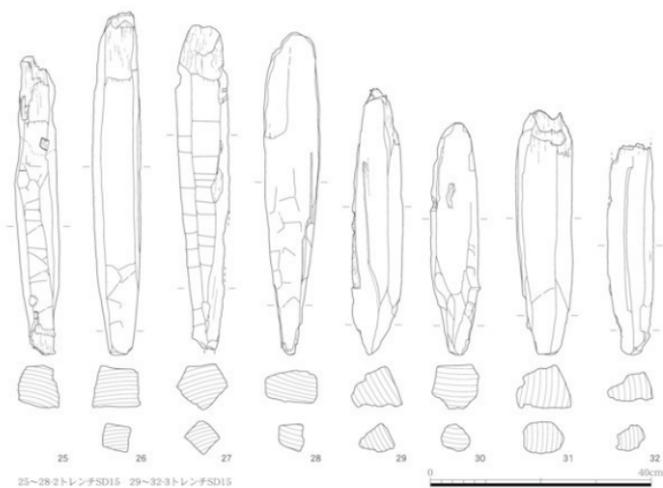
3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナに10箱である。小片が多く、図示できるものは限られる。主に、2トレンチと3トレンチの包含層および溝SD13から、各時期の遺物が混在する状態で出土した。

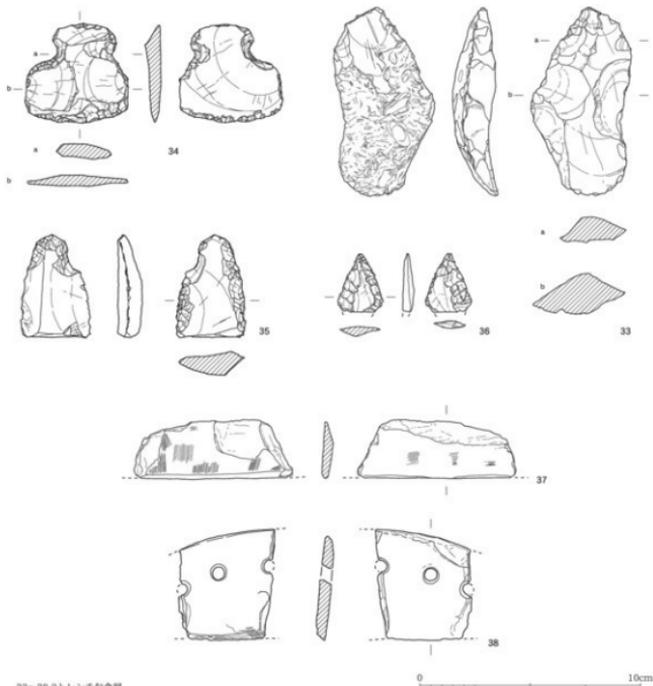
弥生土器の底部(1・2)、高杯脚部(3)、古墳時代の土師器高杯(4～9)、須恵器の高杯(12)、杯蓋(13)、杯身(14)、長岡京期から平安時代の土師器高杯(10・11)、須恵器の壺(15・18)、蓋(16・17)、風字碇(19)、椀(20)、壺(21)、中世の土師器小型壺(22)、瓦器の香炉(23)、脚部片(24)などがある。1・2は、内外面とも摩滅する。3は、中実の柱状部から底部が広がる。内面に蜘蛛の巣状のハケメ痕が残る。4～9は、中実の柱状部。内面にしぼり目をとどめる。12は、透かし孔の有無は確認できない。13は、復原口径10.4cm、器高3.2cm。14は、復原口径12.6cm。15は、壺Lの頸部。内外面に自然釉が付着する。東海産か。18は、高台



第24図 土器実測図(1/4)



第25図 杭実測図(1/8)



33~38 2トレンチ包含層

第26図 石器実測図(1/2)

径10.8cm。底部中央に降灰した自然釉がたまる。19は、面取りした脚部が1本残る。20は、削り出しの輪高台。内面中央にヘラ記号をとどめる。緑釉陶器と同形態であるが、施釉はされていない。ヘラミガキを施す。21は、復原底径16.8cm。内外面に自然釉が付着しており、部分的に濃緑色の釉がたまる。東海産。22は、口径2.4cm、器高2.6cm。手づくね成形。23は、円形で三足の足が付く香炉。外面に花形のスタンプを押す。24は、三足が付く鼎のような器形か。

杭(第25図) 残存する杭はすべて芯材はなく、打割った辺材の先端を削って尖らせている。残存長は、35cm～60cm。

石器(第26図) 2トレンチの包含層から出土した。石材は、29が粘板岩製、その他はサヌカイト製。33は、自然面を残す石核。34・35は、石匙で、縄文時代。36は、凸基式の石鏃。破損品。37・38は、石包丁。弥生時代。

第3章 長岡京跡右京第792次(7ANIHN-5地区)調査概要

—右京四条三坊八町、今里遺跡、乙訓寺—

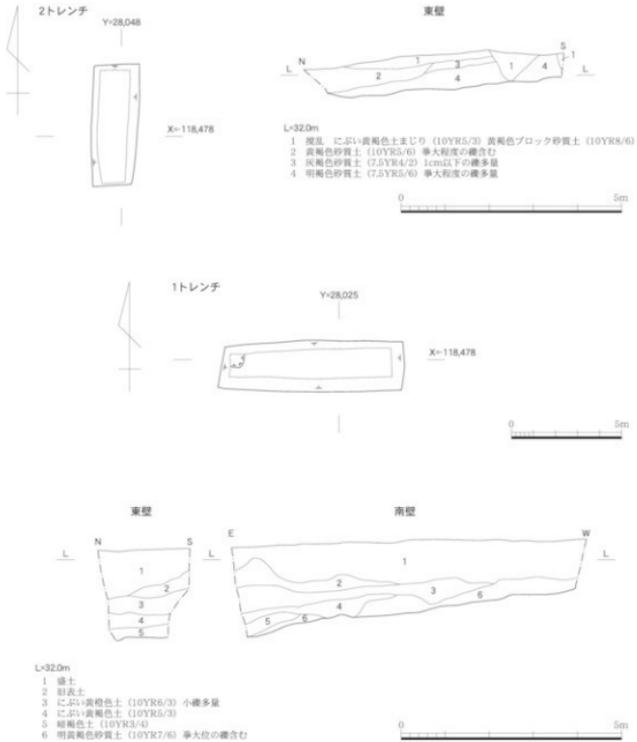
調査概要

調査対象地は、長岡京跡右京第784次調査の南隣にあたり、都市計画街路今里長法寺線の道路拡幅予定地に当たる。これまでの調査地点は開析谷と沓瀬原 I にあたるが、本地点は低位段丘 I に位置しており、周辺では小高い丘が張り出したように残る。付近の標高は約32mあり、暗渠化された風呂川上の道路との比高は約2mである。調査では、既存建物の基礎が深く全体に攪乱を受けていたことから、旧建物の範囲外に2ヶ所のトレンチを設定した。東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした。本調査区の国土座標値は、2トレンチ中央で第VI座標系のX=-118,478、Y=-28,025である。

1トレンチは、東西4m、南北1m。盛土、旧表土以下は礫を多量に含む砂質土が堆積する。西から東へ緩やかに傾斜する地山面となっており、遺構は確認されなかった。

2トレンチは、東西1m、南北3m。盛土、攪乱以下は礫を多量に含む砂質土が堆積する。北から南へ緩やかに傾斜する地山面となっている。遺構は確認されなかった。

なお、本地点の出土遺物は包含層から中近世の土器、陶器類が少量出土しただけである。



第27図 1・2トレンチ平面図・土層図 (1/200・1/100)

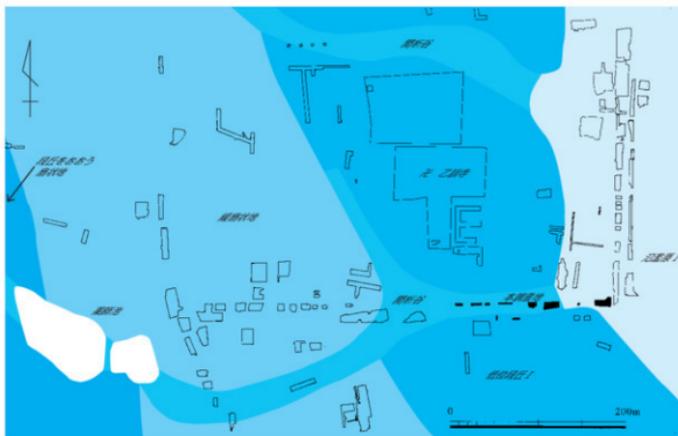
まとめ

今回の調査では、道路幅幅予定地に合わせて10ヶ所のトレンチを設定した。各々の調査区における遺構と遺物のあり方を簡単に列記する。

右京第777次調査の1トレンチでは、風呂川の旧河道に想定される流路が氾濫原に向かって流れるものと段丘裾に向かうものに分岐する。出土遺物は、各時代のものが多数混在しており、段丘上に立地する遺跡の様相をうかがうことができる。中でも、埴輪片が集中するのは本トレンチだけであり、新たな古墳が存在する可能性がある。流路は、上面の包含層遺物などから平安時代前期に埋没したと想定される。掘立柱建物についても正方位を取らない点と、溝との切り合い関係から平安時代と考えられる。

3トレンチでは、他の時期の遺物はほとんど混入しておらず、長岡京期を中心に遺物が出土した。一方、2トレンチでは旧河道と見られる溝は見当たらないが、江戸時代前期の溝は西から東へ下る地形に直交して、南から北に落ち込む。現在、2・3トレンチの間に鉤形に折れる小さな水路は、その名残りであろう。

右京第784次調査では、2・3トレンチから風呂川の旧河道と考えられる流路を確認した。この間はほぼ直線的であるが、隣接する東西のトレンチでは確認できなかったことから、急な折れ方を示すようである。出土遺物は、長岡京期を中心に出土した。流路の北側は未調査であるが、杭が2ヶ所に集中する状況は、ここに護岸した橋が架けられていたものであろうか。なお、長岡京の西三坊坊間東小路は1トレンチ内に想定されるが確認されていない。



第28図 周辺調査地と地形条件 (1/5000)

本地点では、長岡京期の流路を覆って厚い包含層が堆積している。現状では、開析谷を埋めて整地されたのは江戸時代であり、石垣と溝で区画された屋敷地もこの頃にできたものであろう。

- 注1) 中島皆夫「右京第716次調査概要」『長岡京市センター報告書』第23集 2001年
 2) 中島皆夫「右京第732次調査概要」『長岡京市センター報告書』第27集 2003年
 3) 中島皆夫「右京第740次調査概要」『長岡京市センター報告書』第27集 2003年
 4) 清水みき「第三章第三節 一律令制と乙訓」『長岡京市史』本文編一 1996年
 5) 安藤信策「長岡京域の発掘調査」『京都考古』第5号 1974年
 「乙訓寺発掘調査概要」『京都府概報』1967年
 6) 岩崎 誠『長岡京市センター報告書』第8集 1997年
 岩崎 誠「右京第544次調査略報」『長岡京市センター年報』平成8年度 1998年
 岩崎 誠「右京第544次調査の出土遺物」『長岡京市センター報告書』第19集 2000年
 7) 原 秀樹「右京第412次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
 8) 中島皆夫「右京第407次調査」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年

(参考資料)

長岡京跡右京第740次(7ANINC-14地区)調査出土の緇銭

1 はじめに

本稿は右京第784次調査西調査区の西南西約100m(第2図)で行った今里長法寺線整備事業の第2工区(右京第740次調査)に関するものである。調査では流路斜面に土坑が検出され、この土坑埋土下層より銭貨一緇が出土した。銭貨は埋置当時の緇銭状の状態をよく保っており、当センターでは緇銭の非破壊的な分析調査と調査指導を独立行政法人奈良文化財研究所保存修復科学研究室主任研究官高妻洋成氏に依頼していた。今回、高妻氏より玉稿を頂き、その成果を本書に収めることができた。

2 緇銭の出土状況

緇銭は東西方向の不整形な土坑S K27より出土した。土坑は流路の肩部と重複しており、東西約3m、幅1~1.7m、深さ0.9mの規模を持っている。埋土は上半の第1~3層が茶灰色土、第4層に地山土混じりの黄灰褐色土、最下層は比較的粘性が強い灰褐色土であり、緇銭は第4層から出土している。一緇が折れ曲がった状態と推定され、出土位置は土坑底部の中央より北側で、土坑斜面の立ち上がり部に相当する。緇銭は壺などの容器に納められておらず、現地調査段階では有機物に包まれていた状況が確認できなかった。共存遺物には古墳時代の須恵器のほかには土師器、須恵器の破片があるが、いずれも小片であり詳細な時期決定を困難にしている。ただし、土師器片の特徴や遺構埋土の性質から平安時代以前の可能性が高いものと考えられた。土坑の輪郭は東側、すなわち流路側が不明瞭で、底部からは絶えず水が湧き出していた。このような特徴から土坑S K27に湧水坑としての性格を推測すれば、緇銭の「埋納」には水に関わる祭祀的な意味が想定できる。

長岡京跡における古代銭貨の出土例は条坊側溝が過半を占める。その他には井戸、土坑、流路があり、特殊な例として土器埋納坑、墓を挙げることができる。土坑からの出土例は意外に少なく、本調査の土坑S K27のような大量出土例は数地点に限られる。大量出土の定義は難しいが、仮に条坊側溝を除く単独の遺構から10点以上が出土した場合に限れば、本市域における事例は6地点の8例、さらに神功開寶までの3種では3地点で限られた出土状況であることが分る。また、緇銭として出土した例は長岡京跡全域でも類例が認められない。(中島 皆夫)



第29図 緇銭出土状況(南東から)

3 緋銭の状態と調査方法

緋銭は、その銭貨が相互に固着した状態で出土したが、現在、2つの塊に分離した状態にある。表面全体に土が付着しており、銭貨の総数や銭貨を束ねるための紐は確認できない。錆の進行を抑制し、有機質の付着物の乾燥による収縮などを防いで、出土したときの状態をできる限り保持することを目的に、この緋銭はエチルアルコール中で保管されていた。

緋銭に対しては、銭貨の総数、銭貨の種類、銭貨を束ねるための紐の材質、緋銭を包んでいたか否かなどの調査項目が考えられる。緋銭の状態で出土した銭貨は互いに固着していることが多く、前述の調査はそれらを分離した上で行なわれるのが通例である。しかし、今回長岡京跡で発見された緋銭については、緋銭の形状を保持した状態で保存を図りたいという要望があった。このような観点から、調査の方針としては、以下の手順・方法を適用することとした。

- 1) クリーニングによる土の除去を慎重に行なう。
- 2) 銭貨を束ねるための紐および銭表面に付着している植物繊維の材質を同定するために、緋銭の形状を外観において損なうことのないようにきわめて微量のサンプリングを行ない、フーリエ変換顕微赤外分光分析（顕微FT-IR）を行なう。
- 3) 保存処理を施して安定化を図る。
- 4) 銭貨の種類を非破壊で調査するために、X線コンピュータ断層撮影（XCT）を適用する。

なお、これらの作業は独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室において行なった。

4 保存処理の概要

緋銭に対して行なった保存処理の概要は以下のとおりである。

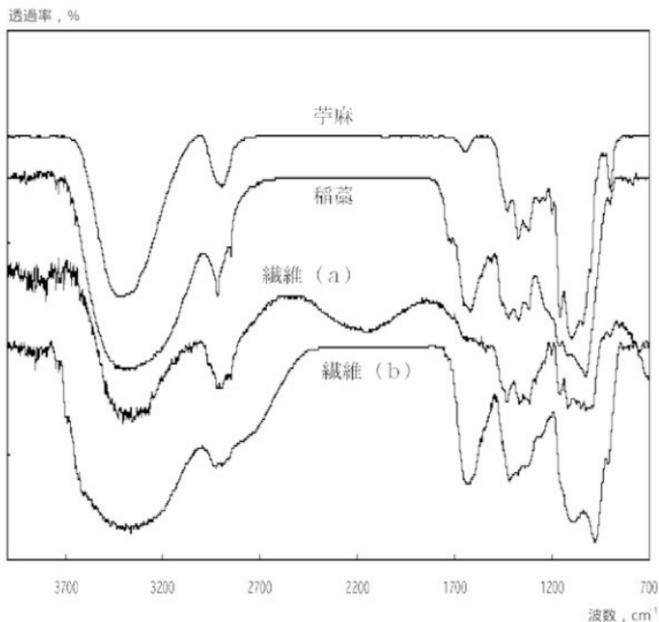
- 1) 保存処理前の写真記録。
- 2) X線透過撮影による内部構造調査。
- 3) 実体顕微鏡下において、エチルアルコールと面相筆を用いて付着している土を除去（クリーニング）。
- 4) クリーニング後、銭貨を束ねるための紐および銭表面に付着している植物繊維の材質分析のためのサンプリング。
- 5) 2%ベンゾトリアゾールメチルアルコール溶液に24時間浸漬（安定化処理）。
- 6) メチルアルコールによる洗浄（2回）。
- 7) 3%アクリル樹脂（商品名：バラロイドB72、溶媒としてアセトン：トルエン=1：1（v/v）を使用）に浸漬（接着・強化）。
- 8) 保存処理後の写真記録。

保存処理前後の写真を図版12（2）にそれぞれ示す。

5 附着している繊維の分析

緞銭の両端に相当すると推定される部分には、半球状を呈する銭貨を束ねるための紐の痕跡と思われる部分がある。また、緞銭の側面にも植物繊維と思われるものが附着している。これらの部分から、微小片のサンプルを採取し、顕微F T- I R分析を行なった。顕微F T- I R分析には堀場製作所製フーリエ変換顕微赤外分光光度計 F T-520を用い、分解能 4 cm^{-1} で 700 cm^{-1} から 4000 cm^{-1} をスキャンした（積算回数100回）。第30図に得られた赤外吸収スペクトルを示す。

銭貨を束ねるために用いられたと思われる繊維（a）および緞銭の側面に附着していた繊維（b）の赤外吸収スペクトルを苧麻および稲藁の赤外吸収スペクトルと比較すると、両者のいずれかに合致したスペクトルを示しているとはいいがたい。しかしながら、セルロースに由来する吸収などを示すことから、少なくともこれらの繊維が植物性の繊維であるということができる。また、緞銭側面に附着している痕跡程度の繊維片からは「燃り」や「織組織」などを判別することはできなかった。



第30図 赤外吸収スペクトル

6 X線CT法による銭貨の調査

相互に固着した銭貨を分離することなく、非破壊でその種類を調査するため、X線コンピュータトモグラフィ（XCT）により断層撮影をおこなった。用いた装置は日立製作所製HiXCTである。

得られた断層画像のうち、銭種の判明したものを図版10-12に示す。XCT撮影に際し、銭に铸された文字をできる限り判読するため、数回断層の傾きを変えて撮影した。図版に示したXCT画像のスケールは特に正確なものではないことを記しておく。

付表-2 緡銭の銭種

銭種	枚数
和同開珎	6
萬年通寶	16
神功開寶	36
不明	14
計	72

銭の腐食が進行し、文字を判読することが不可能なものが多かったが、判読の根拠としては以下の観点をを用いた。

- 1) 「神」および「功」のいずれか1字でも判読できるものは「神功開寶」である。
- 2) 「萬」、「年」および「通」のいずれか1字でも判読できるものは「萬年通寶」である。
- 3) 「同」および「珎」のいずれか1字でも判読できるものは「和同開珎」である。
- 4) 「神」であるか「和」であるかが区別できない場合、「功」と「同」、あるいは「珎」と「寶」のどちらであるかを連続したXCT画像から判読する。

上述の観点をもとに、XCT画像を精査した結果、総数72枚のうち、58枚の銭種を明らかにすることができた。判明した銭種は、和同開珎、萬年通寶および神功開寶の3種類のみであり、神功開寶、萬年通寶、和同開珎の順に枚数が多かった（付表-2）。

7 まとめ

長岡京跡右京第740次調査により出土した緡銭に対して、顕微FT-IRとXCT法により分析調査を行なった結果、和同開珎、萬年通寶および神功開寶の3種の古代銭貨を植物繊維で緡銭として埋納したものであることが明らかとなった。この緡銭表面には植物繊維が付着しており、何らかの形で繊維製品（布あるいは紐など）が緡銭と接していた可能性も考えることができる。この植物繊維については、その遺存状況が痕跡程度であり、糸の撚りやあるいは織組織などを確認することはできなかった。

高妻 洋成（独立行政法人奈良文化財研究所 保存修復科学研究室主任研究官）

付表- 3 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしまいぞうぶんかさいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	原 秀樹、中嶋皆夫、高妻洋成
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡(右京第777次) 今里遺跡 乙訓寺	長岡京市今里 三丁目1	26209	107 032 028	35度59分 56秒	135度59分 59秒	20030623 - 20030822	341㎡	市道拡幅 工事
長岡京跡(右京第784次) 今里遺跡 乙訓寺	長岡京市今里 三丁目2	26209	107 032 028	35度59分 56秒	135度59分 58秒	20030825 - 20030930	104㎡	市道拡幅 工事
長岡京跡(右京第792次) 今里遺跡	長岡京市今里 二丁目9	26209	107 032 028	35度59分 56秒	135度59分 58秒	20031027 - 20031031	29㎡	市道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第777次)	都城跡	長岡京期	溝	弥生土器、土師器、須 恵器	
今里遺跡	集落跡	平安時代	堀立柱建物	緑釉陶器、青磁	
乙訓寺	寺院	江戸時代	土坑、溝	埴輪、石器	
長岡京跡(右京第784次)	都城跡	長岡京期	溝	土師器、須恵器	
今里遺跡	集落跡	江戸時代	土坑、溝、石組	弥生土器、石器、埴輪	
乙訓寺	寺院			陶磁器	
長岡京跡(右京第792次)	都城跡				
今里遺跡	集落跡	江戸時代		土師器、陶磁器	段丘の緩斜面

圖 版



(1) トレンチ全景 (西から)



(2) 流路S D06と掘立柱建物S B05 (北から)

長岡京跡右京第777次調査

図
版
一



(1) 流路 S D06A-A' 断面 (東から)



(3) 掘立柱建物 S B05 (西から)



(2) 流路 S D06E-E' 断面 (西から)



(4) 2トレンチ全景 (東から)



(1) 3トレンチ全景(東から)



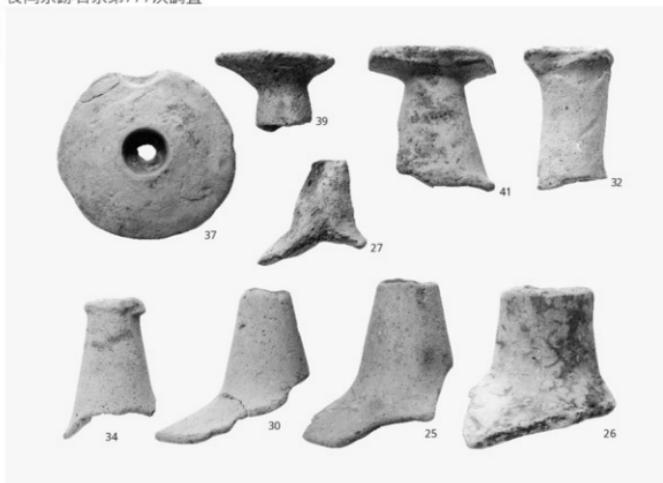
(2) 溝SD07(北から)



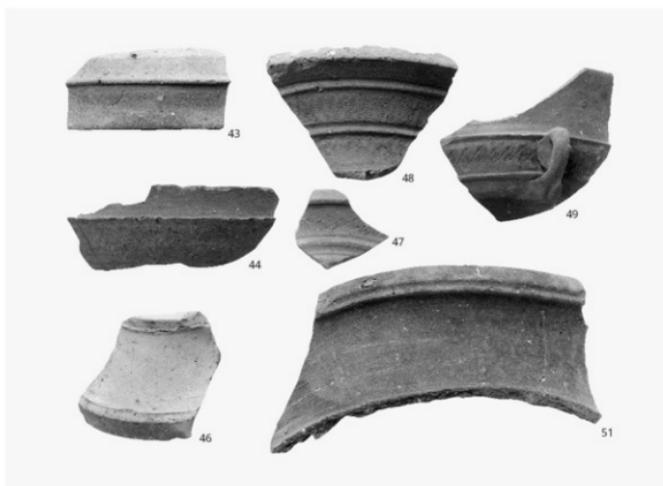
(3) 流路SD11(東から)

長岡京跡右京第777次調査

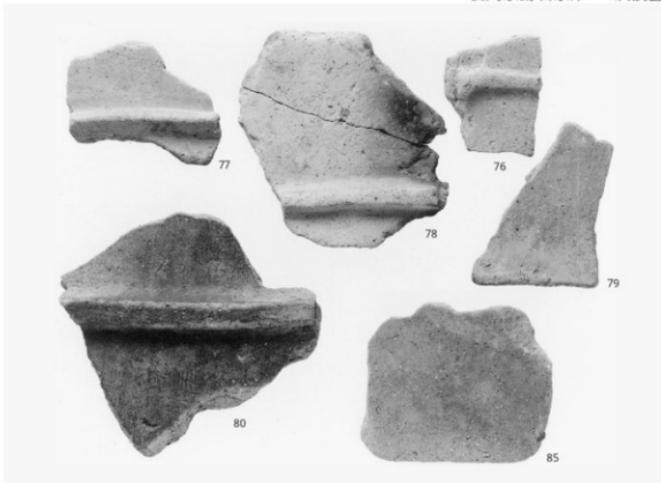
図
版
四



(1) 古墳時代の土師器



(2) 古墳時代の須恵器



(1) 埴輪



(2) 平瓦

長岡京跡右京第784次調査

図
版
六



(1) 1トレンチ全景 (西から)



(2) 石列S X 03 (北から)



(3) 石列S X 11 (北東から)



(4) 流路S D 15 (東から)



(1) 2・3トレンチ全景 (東から)



(2) 4トレンチ全景 (東から)



(3) 石垣 S X06 (北から)



(4) 石垣 S X06 桐木 (南から)

長岡京跡右京第784・792次調査

図
版
八



(1) 調査地遠景 (東から)



(2) 1トレンチ全景 (西から)



(3) 2トレンチ全景 (南から)



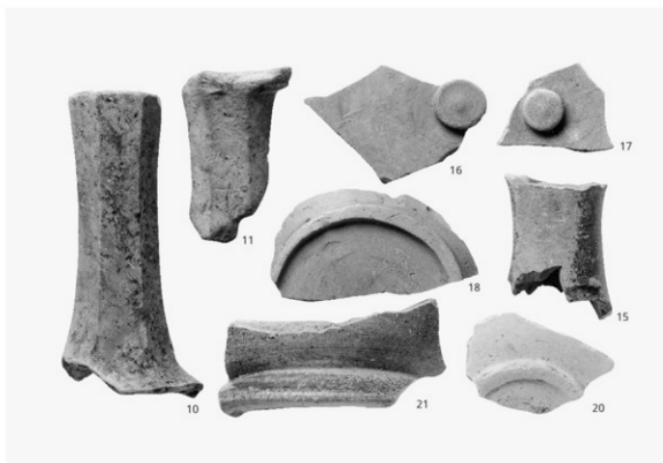
19

(1) 風字硯



24

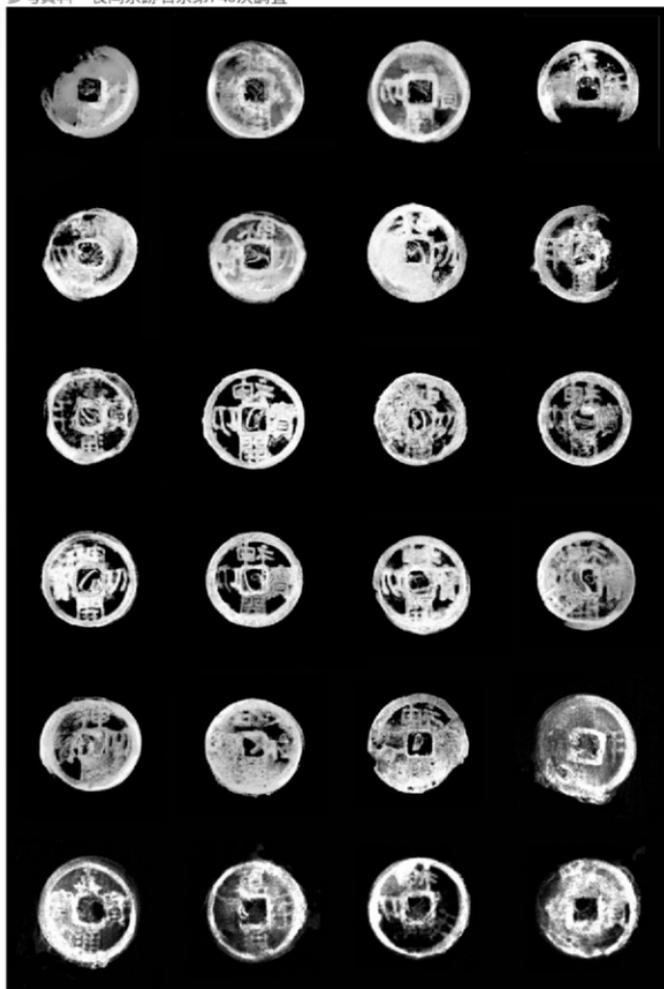
(2) 瓦器脚部



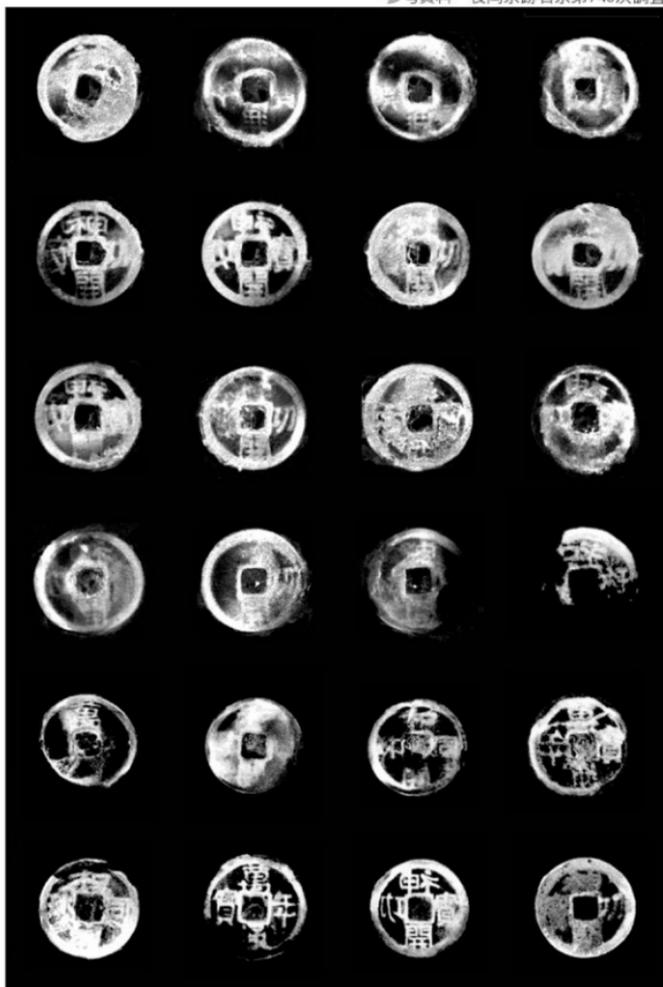
(3) 長岡京期から平安時代の土器

参考資料 長岡京跡右京第740次調査

図版
一〇



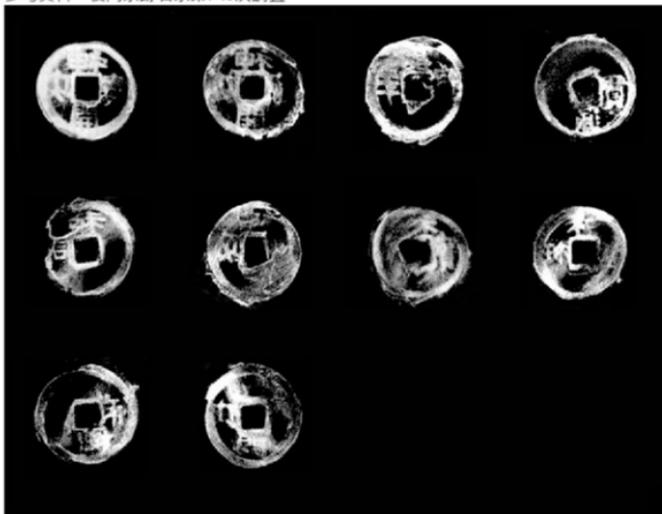
緡銭のX線CT画像-1



銅銭のX線CT画像-2

参考資料 長岡京跡右京第740次調査

図
版
二
二



(1) 緡銭のX線CT画像- 3



(2) 処理前後の緡銭(左- 処理前、右- 処理後)

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第37集

平成16(2004)年3月28日 印刷

平成16(2004)年3月30日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1
電話 075-955-3622
FAX 075-951-0427

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2
電話 075-361-912(代)
FAX 075-371-0666

